

「ス的人文主義思想など」の「東西両思想に関する学殖と識見を必要とする」、と述べている(序二―三頁)。さらにこれには、本書史料篇や第6論文に示されるように、欧文(ラテン語を含む)や和文の古文書を読みこなす能力をも付け加えなければならぬであろう。

長きにわたる井手氏の研究は、おそらく誰が考えても一身にしては成し難い程の分量のことを一つ一つクリアーしようとしながら進めてこられたものである。全五八一頁、それに加えて索引一四頁を付した大部の書である本書を、「まえがきとしてのささやかな試論」と位置づけることは、そのような困難な道を歩んで来た氏であったからこそなし得るものであるように思われる。序の中で井手氏は続けて、「大航海時代と称される世界史的視点から、将来、キリシタン思想史研究の「本論」が展開されることを期待している」(序三頁)と述べているが、教養課程を解体しいわゆる「専門化」に血道をあげている現今の大学をめぐる状況を考えれば、この「本論」の展開はやはり井手氏自身の手によって実現されるほかないのではなからうか。

(玉川学園女子短期大学助教授)

横山俊夫編

## 『貝原益軒 天地和楽の文明学』

(平凡社・一九九五年)

佐久間 正

本書は、一九八八年から四年間にわたって行われた京都大学人文科学研究所の共同研究「貝原益軒とその時代」の報告書である。また、本書には、八九年から九二年まで三次にわたり開催された京都国際セミナー「安定期社会における人生の諸相」および九二年度文部省科学研究費補助金による「貝原益軒本流布に関する社会史的研究」の知見も反映している。

本書の問題意識は、編者の横山俊夫による「序」に述べられている。従来の益軒像は「近代日本の学術分業にしたがい、ばらばらになりすぎている」、また「後知恵による評価が目立つ」と批判され、益軒の生きた時代の中で彼の実像を捉えようとする。本書の特徴は、この彼が生きた時代を「安定社会」と捉えることにあるが、このような問題意識は、次のような現代社会の近未来像が念頭にあるからである。現代社会は百年と経たないうちに、人口と資本の困難な制御を実現し、「天地人の調和のため」と、その時点の人間が考える詳細な礼法体系に固められた社会」、「地球規模での超安定社会」となるのではないか。そ

のように考えると、「安定社会」というものがもたらす閉塞状況の、いわば小規模なシミュレーションであった」と見なしうる時代を生きた「文明論者」益軒から学ぶものは少なくないという。ここでは、そのような近未来像の当否について論じることとはしないが、問題は、そのような問題意識によって、従来の益軒研究では看過されてきたものが新たに見えるようになったか、近代の後知恵による「瘦せ細った」益軒像ではなく生きた等身大の益軒像を描きえたかであろう。

本書の構成は以下のとおりである。

序 安定社会を生きる——益軒翁のうわさによせて

横山俊夫

I 隠者はやりの世に

第一章 達人への道——『楽訓』を読む

横山俊夫

第二章 詩人としての貝原益軒

深澤一幸

第三章 公家・武家・儒者 ジェームス・マックマレン

第四章 近世前期の大名と侍講

藤井譲治

II 益軒の学をたどる

第五章 「學術」の成立——益軒の道徳論と学問論

辻本雅史

第六章 君子の知——益軒の「博学」をめぐって

松村浩二

第七章 『大疑録』にいたる道

三浦秀一

第八章 中国養生文化の伝統と益軒

麥谷邦夫

III 益軒現象をさぐる

第九章 『家道訓』の世界——不器量のすすめ

横山俊夫

(本論は、前川和也編『家族・世帯・家門』、ミネルヴァ書房、一九九三、所収の「貝原益軒『家道訓』考」を補訂したものである)

第一〇章 儉約と養生——益軒養生論の特質と受容

第十一章 益軒本の読者

塚本 明  
横田冬彦

こうしてIでは、「安定社会」と益軒の関わり、「安定社会」における儒者・大名のあり方が論じられ、IIでは、益軒の著述における膨大な古典の引用を見極めつつ、益軒の思想と先行思想との関連が考察され、IIIでは、益軒の著述の読まれ方が分析される。

横山は「序」で益軒の思想を「空間が限られた時代の非成長の哲学」と呼んでいる。それは、「徹底した『今』の肯定」の上に「礼による宇宙的調和」を求め「自己抑制」を第一とするが、単に自分を抑制するという消極的姿勢のみでなく、楽しく生きられてこそ抑制の意味もあるとし、「楽」の意義とその工夫を示すものであった。このような益軒の思想の特色は、第一章、第二章、および第九章で具体的に論じられている。第三章は、岡山藩致仕後の「隠者」熊沢蕃山と公家中院通茂との間の

源氏物語解釈をめぐる緊張をはらむやりとりを論じ、隠者の一つのあり方を示している。第四章は、若狭小浜藩の大名酒井忠直（大老となった酒井忠勝の嫡子）に関する史料を分析し、講書で取り上げられた書籍は和書が漢籍を圧倒し、漢籍の中でも儒書の比重は三割程度であること、侍講一三人のうち儒書を講じたものはわずか四人であり、侍講＝儒者という図式は成り立たないことなどを指摘し、総じて一七世紀後半における大名の学問としての儒学の位置も、侍講としての儒者の位置も高いものではなかったと結論づける（第四章の史料理解に関しては後述する）。まさに横山が「序」で指摘するごとく、「安定社会」は「彼ら（知識人）に対する社会の期待がまことに薄い時代であった」。

第五章では、益軒が宋明学に至る中国思想をいかに吸収し、その中でいかなる思想世界をつくりあげたのかが極めて説得的にまとめられている。辻本は、朱子学の「天理」や「本然の性」に依拠しない益軒の道徳論の根拠こそ彼の「天地に事へる」説であるとし、益軒儒学の実践的課題は、「天地の道」を規範とし、人は人間と万物にいかに関わっていくべきかであったとし、「物」の世界を排除せず、むしろ天地、人、物の三者の連続的なかわりあいを問い、そのなかでの人のあり方を考える」点にこそ、「天地にも比肩しうる人の自律性の論理をもった朱子学とも質を異にした、益軒儒学のもつ独自の特質があった」という。そして、次のように指摘する。「天地の道を規範とした自己抑制の生き方」をめぐる益軒の主張は、その思想に「著し

い保守性と穏健さ」を与えた。自己の不完全さの自覚や受恩的存在としての自己意識に基づくそのような保守性は、消極的な人生観に見えるが、反面、やむことのない天地生生の活動に対する宗教的信仰にも近い心の持ち方によって、自らを強く律する規範となっている。すなわち、「天地の常行」のつとめて日々勤め慎しむことこそ、卑小な自己が「天地に事へ」、天地につながる道とされたのであり、換言すれば、そのような主張は、自己を律する生活の中で、倦まずたゆまず勤めてやまない勤勞的精神の強調であった。そこに見られる実践主体は、天下・社会を自らの身に引き受けていく意味での「世界大」の主体には決してなりえないが、しかしその主体は、受恩的存在としての責任意識のもと、やむことのない天地を規範として、与えられた自己の場や分において、どこまでも慎み勤め行う自律した強靱な実践主体であった。そして、「消極的な自己抑制を基調にしながら、自律した強靱な実践主体のありかたを説く」このような益軒の人生観は、石田梅岩などの思想にも共通した性格を見出すことができ、おそらく近世の民衆にはかなり普遍性をもった思想の傾向であったと指摘する。安丸良夫のいう通俗道徳論にもつながらる以上の辻本の所説は、益軒の思想の思想的意義、あるいは社会的性格を考える上で傾聴すべきものである。

続いて辻本は、益軒において先に指摘した実践的課題に応えるための方法が「術」（人に対する「術」が「礼」であるとし、

しばしば取り上げられる「物理の学」という益軒の把握との関連を次のように述べる。「物の性（物の理）を具体的に窮め知る（窮理の学あるいは「物理の学」）ことによって、「物を愛する」方法（物に対する人の適切な関わり方、つまり「術」）がわかる。こうして、「物を愛する」という仁の実践が可能となり、「天地に事へ」正しい人道を行えるというのである。朱子学の体系的理論のもと、「術」の学を構想した益軒儒学は、諸々の「術」の書の「総論」にもっともふさわしい思想であり、このような益軒儒学によって、「術」の学が一定の世界観の文脈の中に位置づけられたと結論する。そして辻本は、学問を「術」と捉える益軒の学問観は、それまでの学問観に一つの転回をもたらすものであったとする。近世学問史における益軒の思想と学問の意義・位置についての極めて適切な指摘であろう。

第六章では、以上の益軒儒学の内容と構成から必然的にもたらされる「博学」が取り上げられる。益軒が「博学」に言及する際、必ずといってよいほど繰り返される広大無窮なる理と有限なる人知という把握が、「学問の道は天下の公道」として、自閉し固定した学派や信仰的な師弟関係を排し広く外に開かれた学問観をもたらしたという松村の指摘は、益軒儒学の思想的可能性を考える上で重要であろう。

第七章は、『大疑録』に至る益軒の思想の展開を論じる。益軒は『黒田家譜』編纂の過程で小瀬甫庵の『太閤記』などに見られる天道思想の意義を捉えるようになり、五〇歳前後の宋

明性理学を彼なりに整理しはじめた時期には、彼の内には思想的価値基準として天道思想が確立していた。同時期にはまた「天道と相即する観念として神道が導入され」、神道思想にも接近するようになった。仏教への対抗上、儒教が社会的に認知されるための同盟軍として神道への接近が図られたのであろう。三浦の以上の理解については異論が少なくないので、あらためて後にふれる。

第八章では、まず宋・明に至る中国養生文化の展開がわかりやすく述べられる（教えられる点が少なくなかった）。そして、益軒の『頤生輯要』（『養生訓』の元となった養生に関する漢籍の記事を抄出編纂した資料集）の特徴として、第一に、中国の養生文化の重要な要素である神仙ないし道教的養生術が排除されていること、第二に、中国の養生書の多くは養生のための実用的な薬剤の処方を作成しているが、それらが一切ないことを挙げる。そこには、「自己一身の養生のみを考えると、独善的な発想」がなく、また「時代、地理、風俗の違いを重視し唐土の学問を鵜呑みにしない態度」が認められるとする。麥谷によれば、益軒は、彼の独創のようにいわれる「楽志」をも含めて、中国の養生文化の伝統を踏えつつ、日本の風土・社会・文化に適合するものを自らの思想的立場から取捨選択し、再構成することによってその養生説を築いたのであり、伝統的な儒家の養生説を踏まえながら、養生とは自己の私的な身体を保持を目的とするものではなく、あくまでも聖人の道の実践、義理の達成

を常に可能にしておくためにこそ意味のあるものであるとし、肉体的な養生と同時に精神的な保養を強調したのである。本章の指摘は、養生思想にとどまらず中国思想に対する益軒の態度を考えるうえでも参考となろう。

第一〇章では、まず儉約論・養生論の背景である都市社会に對する益軒の認識が取り上げられ、それが当時の都市社会の実際をかなり直截に反映するものであり、彼は都市社会ないし都市化が進む時代について好意的な認識を示していたと評される。そのような認識を踏まえ、益軒の養生論と儉約論は論理的にパラルレルに説かれたとし、「益軒の儉約論の要点は、儒教道徳に基づく家の存続のため、あるいは欲を捨てた後の楽の境地を得るといふ高尚な觀念論というよりもむしろ、我が身の日々の健康・養生を目的とする、いわばいたって功利的なものではなかったか」と結論する。続いて、益軒養生論のその後の受容と批判について具体的に紹介し（教えられることが多かった）、益軒以後の養生論においては、公儀法とより接近し、民衆の生活を律する枠組みを強めることとなり、確かにそれらは民衆の衛生や健康についての意識を向上させたであろうが、それが道徳と結び付き、「身体の私事性」を薄れさせることによって、別の機能を持つようになったと結論する。そして塚本は、養生論の変化に社会の変容が反映しているとし、その延長上に近代社会の成立も見据えているが、確かに益軒以後の養生論の中には近代日本国家における臣民像の一つが予兆されているように思わ

れる。

第一章は、かねての難題である、どのような人々が益軒の著作を購い、どの程度理解したかについて、幾内の庄屋文書の分析を通して明らかにしようとしたものである。横田は、従来の研究がテクストそのものから読者を類推することによって混乱を招いてきたと批判し、河内国の志紀郡柏原村の三田家、北河内郡日下村の森家、石川郡富田林村の杉山家、同郡大ヶ塚村の壺井家（河内屋）の文書を分析することによって、次のように結論する。数百冊の蔵書を持ち、儒学書・仏書・医学書などをもそれなりに読みこなし、和歌や漢詩文を自ら創作する、知的営為としての読書行為が確かに存在していたのであり、しかもそれは村における一軒の庄屋にとどまるものではなく一定の厚みをもって存在し、寺僧や手習師匠・医者などを含み込みつつ、村内および村を越えて、様々なサークルや書籍の貸借を行うネットワークをもって機能していた。そうした営為は、一つには自己の「家」の確立とその維持のためであり、二つには地域社会の中で彼らが村落上層としての生活様式や文化水準を保持し、「民俗」に対して新しい知の主導者として文化的ヘゲモニーの確立をめざすものであった。そして、このような営為は従来考えられていたように決して幕藩制の解体期の現象ではなく、幕藩体制の確立とともに成立し、元禄・享保期にはすでに豊かに認められるものであった。益軒の著作はこのようなネットワークの中で受容されていったのである。

以上の論考を通じて本書は確かに従来の益軒研究を大きく前進させるものとなったといえよう。単に個別益軒研究にとどまらず、近世社会と儒教・儒教という近世の社会と思想を考える上で逸することのできない重要な主題への新しい切り口を示すものともなっている。横山は「序」で、「益軒の生前や没後に刊行された彼自身の著作にとどまらず、甥の好古や兄の楽軒、弟子の竹田定直との合作といえるものをくわえ、さらにこれら「益軒先生」なるイメージにあやかっていた出版物をもあわせて「益軒本」と呼び、そのひとまとまりとしての盛行ぶりを「益軒現象」ととらえるなら、今後すすめたいのはまさにこの現象の社会的解明である」と今後の研究課題を示し、既にその準備が進められていることを紹介しているが、今後の実り多い成果が期待される。

以上、筆者が本書から学んだ事柄を中心に本書の内容を紹介してきたが、本書のいくつかの所説には異論もあり、また共同研究報告とはいえ個別論文を収録したものであるためか、それらの間に評価の違いも見うけられるので、以下、本書の理解をより深めるといふ立場から、紙幅の許すかぎりそれらの点に關して述べてみたい。

先にふれたように第七章では、益軒は宋明性理学を天道思想に基づいて整理・解釈したとされるが、益軒の思想変革をもたらしたとする「朱熹の思想を、現実の問題との緊張関係に置いて把握し直す機会」、具体的には「黒田藩という現実とのかか

わり」が『黒田家譜』編纂以外明瞭ではなく、したがって「太極図説」に対する益軒の評価の変化や「困知記」の著者である羅欽順の思想の受容に關する言及はあるものの、益軒が朱子学のどこに問題を感じ、どのように修正したのが全体として不明瞭である。このことは、天道思想を三浦がどのように思想的に位置づけているのかが不鮮明であることも関連している。「人間の不徳を懲らしめる」「勸善懲惡の主宰者としての」「外在者としての天道」という内容を主とする天道観によつて、宋明性理学が整理されたとするよりも、辻本の指摘するように、そして三浦自身もふれているように、益軒儒学の思想的根柢であるとともにその思想的枠組みを提供している「天地に事へる」説の形成過程と思想的系譜関係を検討すべきであろう。また、仏教への対抗上、儒教が社会的に認知されるために神道への接近が図られたといういわば思想外在的理解も疑問である。益軒における神道思想の問題は『神紙訓』などの史料批判も含めて慎重に取り扱う必要があるが、例えば第一章で指摘されている益軒の外国観などとの関連も注意されなければならない。

第一〇章では、益軒の儉約論＝養生論の要点は「我が身の日々の健康・養生を目的とする、いわばいたって功利的なものではなかったか」としているが、第八章の麥谷の指摘からいっても、それは正しくないように思われる。この塚本の指摘は読まれ方として理解すべきものであろう。また塚本は、益軒の養生論には汲田克夫のいう「身体の私事性の否定」（貝原益軒の養生観

